

ヨーロッパ公開から6年後、ようやく日本でも公開されたドキュメンタリー映画「カール・ラガーフェルド ファッションを創る男」のなかで、ミステリアスな天才デザイナーは、観客に刺激的な言葉のシャワーを浴びせる。

「孤独は勝ち取るもの」「この業界では不公平が当たり前」「ファッションははかなく、危険で理不尽」「月並みな関係などゴメンだ」などなど、過激でありながら心を奪う名言の数々の中に、こんな言葉がある。

「私はアイデアを出しデザインするだけ。形にできるのは熟練した職人技のおかげだ」

唯我独尊を演じているようなところもあるラガーフェルドが、素直に、職人たちに敬意と感謝を捧げる。それがたんなる言葉の上だけのことではないという証拠に、ラガーフェルドがデザイナーをつとめるシャネルは、11年前から「メティエダールコレクション」を発表している。

メティエダールとは「匠の技」。シャネルはフランスの伝統的なクチュリエを数社、傘下に収めているが、そのアトリエの高度な職人技術や貴重なノウハウをふんだんに使って、年に一度のプレタポルテコレクションを行っている。何もしないでいけば時代の波に取り残され、消えてしまうおそれもある職人の伝統的技術を、最新で最高のモード表現によって存続させ、未来につなげていく。それが「メティエダールコレクション」なのである。

現在、傘下に収まるのは、コスチューム・ジュエリーの「デリュ」、羽根細工やカメラアを作る「ルマリエ」、帽子の「ミッシェル」、刺繍の名門「ルサーージュ」、マレーネ・デートリツヒも顧客だった靴の「マサロ」、金銀細工の「ゴッサンス」、フローラルアクセサリーの「ギエ」、刺繍の「モンテックス」、そして高級レザーグローブの「コース」。いずれも古い伝統をもち、フランスのオートクチュール業界を支えてきたアトリエである。

こうしたアトリエは、豊かな時代のみならず、危機のときにおいても、フランスのモードを支え、時に救ってこきた。第二次世界大戦中、パリがドイツ占領下にあったとき、ヒト



フランス刺繍の代名詞「ルサーージュ」の仕事

Richesse Oblige

リシェス・オブリージュの精神

Vol.6

【ブランドによる伝統技術の保護】

Preservation of Artisan Techniques

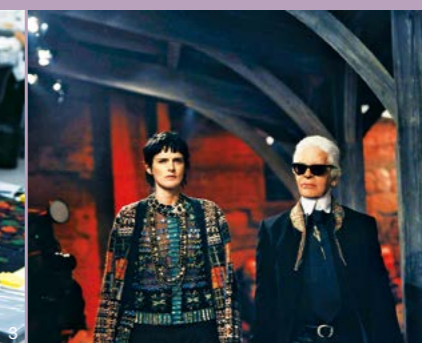
社会に階級が存在した時代、アッパークラスには「ノーブレス・オブリージュ」が課せられていました。クラス社会が（表向きは）なくなった現在、その自己犠牲の精神は富裕層に引き継がれています。今回は私たちの消費がその一助になる「ブランドによる伝統技術の保護」について考察します。

Photos : SADAHO NAITO (CHISO) Text : KAORI NAKANO Realization : KAZUHIRO NONAKA

文／中野香織

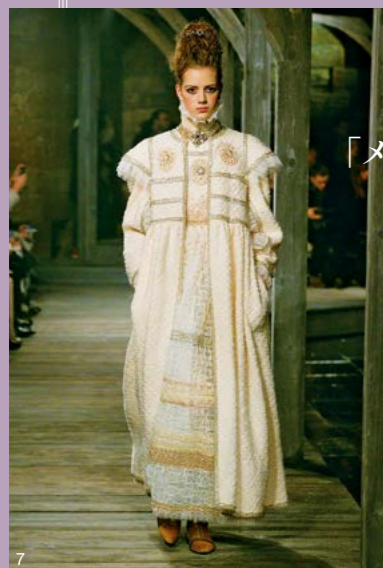


フェザーのアトリエ「ルマリエ」



「ファッションを創る男」カール・ラガーフェルド

中野香織
Kaori Nakano
なかの・かおり ●エッセイスト、服飾史家。過去2000年分のファッション史から最新モード事情まで、幅広い視野から研究、執筆、レクチャーを行っている。東京大学大学院修了、英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆家。2008年より、明治大学 国際日本学部 特任教授を務めている。中野香織オフィシャルブログ / <http://nakanokaori.cocolog-nifty.com/>



シャネルの「メティエダールコレクション」

4「モンテックス」もまたパリ・クチュールに欠かせない刺繍のアトリエ。5 高級コスチューム・ジュエリーのアトリエ「デリュ」。6 高級レザーグローブのアトリエ「コース」。このように細分化されたスペシャリティが、世界のどこにもないパリのオートクチュールを支えている。7 シャネルの12〜13年秋冬のメティエダールコレクション「パリエディンバラ」より



パリのオートクチュールを支えるアトリエの数々

ラーはオートクチュールをパリからベルリンに移す構想を立てていた。だが、サンディカ（パリ・オートクチュール組合）会長ルシアン・ルロンの強い訴えによって、これは実現しなかった。ルロンが抵抗のために引き合いに出した理由こそ、このようなアトリエの存在だった。彼は主張した。オートクチュールは、刺繍やアクセサリ、靴など、周辺のこまごまとしたパリの伝統産業の集積であり、それらをすべてベルリンに移すことなど到底、不可能である、と。結果、パリのオートクチュールはベルリンに移されることなく、パリで生きながらえることができたのである。

シャネルは、2002年からこれらのアトリエを傘下に収め始めたが、それは、フランスモードの救世主とも呼べるそのようなアトリエが、伝統を途絶えさせることなく今後も成長し続けられるよう支援するためでもある。ブランドがいわば、一肌脱いで、アトリエを保護し、職人たちに安定した活躍の場を与えていく。ここに見られるのもまた、リシェス・オブリージュの精神である。

12〜13年のメティエダールコレクションのテーマは「パリエディンバラ」であった。ツイード、カシミア、ウールをふんだんに使い、さまざまな素材やアクセサリを高度な技巧で組み合わせたコレクションは、熟練職人がプライドをかけて作り上げたものだけが醸し出すことのできる、別格の贅沢感をたたえている。ファストファッションによるグローバルイズムの対極を行く、重厚華麗なエレガンスである。

このようなリシェス・オブリージュの精神は、ブランド創業者のココ・シャネルがすでに発揮していたことを思い出す。ロシア・パレエの興行師ディアギレフや作曲家のストラヴィンスキーはじめ、20世紀初頭にパリにやってきた芸術家たちを、経済的に支援し、友情（時には男女間の愛情）を交わし、陰のパトロンとなった。保護し、奨励したのは伝統技術ではなく前衛芸術だが、シャネルの友愛に満ちたパトロンージュが、結果としてパリの文化全体を活性化し、巡り巡って、シャネルの創作に刺激を与え、メゾンの顧客を増やし、シャネル本人にも品格を与えていった。相対的に「持てる者」がまずは「与えていく」ことで、関わるものすべてに利益とエネルギーをもたらしながら、結果として自身も潤い、恵みを受容するという「良き循環」。これを生み出し、よどみなく巡らせるこそがリシェス・オブリージュの真髄なのかもしれない。

独自のパトロネージュで
現代美術を盛り上げるルイ・ヴィトン

芸術のパトロネージュということでいえば、例えばルイ・ヴィトンも、数々の印象的な前例を生み出している。とりわけ1997年にマーク・ジェイコブスがアーティストリック・ディレクターに就任して以来、「コラボレーション」という形で現代美術家の支援がめざましい。ステイブ・スプラウス、ジュリー・ヴァーホーヴエン、リチャード・プリンス、そして村上隆に草間彌生。ルイ・ヴィトンのさまざまな製品に彼らの作品を採用するだけでなく、アーティスト本人にもスポットライトを当て、彼らのステータスと活躍の場をさらに別の次元へと押し上げていった。また、パリや東京にある「エスパス ルイ・ヴィトン」ほか世界各地のアートスペースには、現代美術の作品や自社の過去製品が飾られている。1万8000点に及ぶそのコレクションのなかには、芸術家がルイ・ヴィトンに特別注文したものである。審美眼のある芸術家がルイ・ヴィトンのサヴォアフェール（究極の職人技）に一目おいて特別注文するというそのこと自体が、このブランドが保護・育成する職人技に対する何よりの保証になっている。

近年は、才能ある次世代の映画製作者に対する支援も始めた。2012年、サン・ロレンツォ・イン・ルチナに開いたアーティストティックな新店舗、ルイ・ヴィトン ローマ・エトワール メゾン内で映像コンテストを開催、40カ国250作品のなかから3名の受賞者を選び、2万5000ドルを授与している。マークが去った後のブランドの方向性は未知数だが、独創的な芸術への貢献をしてきたことで、ルイ・ヴィトンは、「エシカルな」パトロンの風格を備え、アートの世界を支える別格のブランドという地位を固めたことは間違いない。

メゾンもバッグも
草間彌生のドット模様



8 エスパス ルイ・ヴィトン東京で現在開催中の森万里子のエキシビジョン（03-5766-1094、2014年1月5日まで）。9 2012年に草間彌生とコラボレーションしたバッグ。10 その際、草間彌生のドットに覆われたニューヨーク5番街メゾンのアーティストックな外観



美術の最先端を
展示する
「エスパス ルイ・ヴィトン」

日本にも存在する伝統技術への
リシエス・オブリージュ精神

さて、伝統技術・職人技の保護活動に見られるリシエス・オブリージュの精神は、もちろん日本においても発揮されてきた。例えば、創業1555年、友禪染のきもの伝統を守り抜く老舗、千總。

千總は、染め上げる前の白生地から、すべて自社のオリジナルとしてきものを生産しているが、さらにいえば、その原料となる絹糸の段階から純国産を守っている。中国産の絹糸を使えば価格は抑えられるが、それでは日本の絹産業が途絶えてしまう。誰かが、買い続けて支援することで、日本の絹産業を守らなくてはならない。そのようなリシエス・オブリージュの精神のもと、責任感というよりもむしろ使命感をもって、千總は、絹産業そのものを守る努力を続けている。

そのような使命感をまっとうしようとするれば、守るべき対象も膨大に増えてくる。手描き友禪が完成するまでの工程には、図案の作製から始まり、仮縫羽織い、青花付け、糊置き、地入れ、挿し友禪、蒸し、伏せ糊、地染め、水洗い、湯のし、印金、刺繍……と全部で10段階もあるのだが、それぞれの工程にたずさわる熟練職人がしだいに高齢化していくという厳しい状況にあって、彼らの仕事をなくさない努力をしなくてはならない。しかも、10工程のうち1つ欠けても製品は完成しないので、この分業のシステムそのものをそっくり残していかななくてはならない。一定の仕事量が保証されないとビジネスが成立しない熟練技術の工程をどのように死守していくか。育成に時間がかかる技術後継者をどのように育て、支援していくのか。千總が背負う課題は大きい。

この問題は、作り手の努力だけで解決できるわけではない。きものを購入するという消費活動を、日本古来の伝統を保護し、未来へと継承していくための投資ともみなす消費者のオブリージュ精神も必須である。純国産友禪きものが完成するまでのプロセスを理解し、支援する心意気を備えた消費者の行動が加わることによって、初めて「良き循環」のサイクルは回り始めるのである。

千總が行ってきた伝統技術保護の努力の歴史を伺うなかで、私が最も感動したのは、第二次世界大戦中の話である。

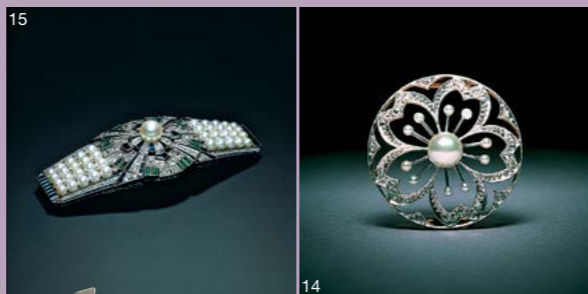
8 Clavis Vuitton / Artime Souvenir. Courtesy of Espino Liana Vuitton Tokyo. 9/10 Clavis Vuitton. 14/15/16 MIKIMOTO

た作品が千總には数十枚残されている。14、15 ミキモトの匠の技が使用されたジュエリー2点。明治40年代に製作された桜モチーフの帯留め（14）。昭和12年に製作された「矢車」（15）。16 大阪造幣局から加工と仕上げを受注した、勤労者に贈られた「勤労顕功章」

11 技術の粋を凝らして刺された狛の刺繍。毛の1本1本までが描写されて、12 糊置き、挿し友禪などあらゆる技法を駆使した「着ることができないきもの」。目利きが見れば感嘆する「超絶技巧練習曲」。13 着ることができないきものは、暖簾のような長方形をしている。こうし

けたが、「真珠養殖事業禁止」規制も追い打ちをかけて生産は縮小。職人技術の保護どころか、操業を続けることがたいが困難となる。しかし、である。私が心打たれるのはやはり、この逆境において発揮されたリシエス・オブリージュの精神なのである。軍国主義一色に見えるこのころの日本において、ミキモトが職人の技術を守り抜くことができたのは、企業努力もさることながら、戦時下にもかかわらず、「パトロン」がいたからでもある。大阪造幣局が、「勤労顕功章」の加工・仕上げの注文を出す。そして大宮御所、皇后宮職が、改作品や注文許可品の注文を与える。「必要」はなくても、それができる立場にある人々が、伝統技術継承のために、なんらかの形で、一肌脱ぎ、「必要」を装う……。そんな光景を思い浮かべたくなるのである。これが幻想であるとしても、貴重な伝統技術がこの時代に失われずに済んだことを、私たちは今、感謝しなくてはならない。

良き循環を生み出すための投資、そんな贅沢は、敵ではなく、素敵だ。「リシエス・オブリージュ」のリシエスとは、世の中にとつて大切なものを守り抜き、未来へ伝えていくために「必要」を装える、心の豊かさのことでもあるのだ。



伝統を守り通した
もう一軒の老舗ミキモト



16

「真珠のミキモト」を支えた
第二次世界大戦下の「特別な注文」とは

ミキモトもまた、第二次世界大戦下に、日本の伝統技術を守り通した老舗である。この会社が、創業当時から、西洋のデザインと技法、及び日本の伝統的な鏝職（かざりしよく）の製作技術を巧みに融合させた「ミキモトスタイル」によって、日本の職人技術を保護・育成してきたことはよく知られている。昭和初期においては、1937年の帯留め「矢車」が、その頂点を極めた作品。「カリブル留め」「ミル打ち」という高度な技法が施されている。

しかし同年、日中戦争が始まり、日本は苦難の時代に入る。金使用禁止令が発令され、装身具の製作は許可制となる。続いて先述の「7・7禁令」が発布され、奢侈品の製造販売が規制される。貴金属装身具業界が被った影響たるや、きもの業界以上に壊滅的である。さらに、戦局が拡大するにつれ、禁酒禁煙、勤儉節約にはじまり、結婚披露宴禁止、パーマメント禁止など、さまざまなことが贅沢だとして禁じられ、「贅沢は敵だ」のスローガンが日本を覆い尽くす。そのような逆境においても、ミキモトは主に外国人に対し営業は続

職人仕事の粋をこらした、着られないきもの



13 12

11